

## 調査研究「LEDのリサイクルの可能性を探る」報告

2019年、蛍光管リサイクル協会は、京都市ごみ減量推進会議助成事業として調査研究「LEDのリサイクルの可能性を探る」にとりくみました。

調査研究の課題意識は、おおよそ次のようなものでした。

「近い将来、蛍光灯に代わり照明器具市場の主役になることが見込まれるLEDについては、現在、それが廃棄物になって排出される時、どのように回収・処理したらよいか、ほとんど検討されていない。このようななかで蛍光灯の回収・処理を確実にを行うシステムを維持しながら、この数年間のうちにLEDの回収・処理システムを準備しなければならない。これらの事情をふまえ、協力団体・企業と連携しながら、「LEDのリサイクル」研究会を設置し、実証的な調査研究を行うことにする。」(京都市ごみ減量推進会議への助成金交付申請書)

調査研究の手法としては、先行研究の調査をふまえ、関係者のヒアリング、現場見学、LED手分解実証事業にとりくみ、調査結果を報告する「LEDフォーラム」を開催し、関係者と意見交換を深めることとしました。

調査研究の結果、次のような成果と課題を確認することができました。



(LED手分解の現場見学)

### ●LEDのリサイクルは技術的には可能であるが、課題は多い

今回の調査研究によって、LEDのリサイクルは手分解であれ、機械破碎であれ、技術的には可能であることがわかりましたが、他方で、事業として成立させるためには課題が多いことも確認されました。なかでもいかに効率よく回収し、リサイクル事業者のところに集めることができるか、そのためのコストに見合う「売却益」がえられるかという問題はなかなかむつかしい問題です。現実的にはリサイクルコストをだれがどこで負担するのかという問題に直面することになりそうです。

### ●自治体にとっては財政負担になるのが現実。拡大生産者責任の議論ができるか。

家庭から排出されるLEDについては当分まとまって排出されるわけではありませんので、時間をかけて問題の解決に当たればよいのですが、いまのままであれば自治体が発行するLEDのリサイクルに関するコストを負担せざるを得ないこととなります。今回、メーカーからの意見が集約できませんでしたが、拡大生産者責任についての議論がさげられないのではないかと思います。

### ●産業廃棄物としての回収・処理システムの確立はいそぐ必要がある

事業所から排出されるLEDについては「産業廃棄物」として回収・処理するためのシステム作りを急ぐ必要があります。LEDは蛍光管のように水銀がふくまれないから他の産業廃棄物と同様の処理でよいとするのか、やはり独自にリサイクルシステムをつくるべきなのか、関係者のなかでの検討を深める必要がありますが、家庭からのLEDに比べ同じものが大量に出てくる条件を活かしたりリサイクルの可能性を探ることが課題になります。

### ●以上の課題意識もふくめて関係者の情報共有がすすんだ

今回の事業を通じて、以上のような課題意識もふくめてLEDのリサイクルについて関係者の情報共有がすすんだのがとても大きな成果であったといえます。

このような調査研究の成果をふまえ、これから京都発のLEDリサイクルシステムづくりの動きがはじまることを期待したいのですが、その際、蛍光管リサイクル協会がどのように関わるのかも課題になってきます。



(LEDフォーラム)